

イタリア・オペラから
ドイツ・リートまで極める
脅威のディーヴァ

私のための《ルチア》

ディアナ・ダムラウは、ディーヴァの範疇に入れてしまうのが多少憚られるほど、ディーヴァの定義と正反対の雰囲気醸し出している可憐でパワフルな妖精のような人だ。1月26日にバイエルン州立歌劇場で初日を迎えたドニゼッティ《ランメルモールのルチア》の中目に楽屋でお話を伺った。

——バルバラ・ヴィソツカ演出のルチアは如何ですか。

ダムラウ（以下D） 今までルチアは沢山歌ってきましたが、既存の演出に自分を合わせて演じてきました。でも、今回の演出は初めての「私のための《ルチア》新演出」なので、演じていてとても楽しいです。例えば、私はルチアをとて強い女性だと思っています。時代の制約のせいで権力は持ち合わせていないものの、実は兄と同じくらい強いのではないのでしょうか。今回のモダンな演出によって、その強さを表現することが、より可能になりました。例えば《狂乱の場》で彼女は

いまや「時の人」ともいえる、ソプラノのディアナ・ダムラウ。「銀の声」と言われる美しい声を持ち、その脅威の歌唱力と併せて、いまだに君臨し続けるグルベローヴァの後継者は彼女しかいないと目されている。また、東日本大震災のあと、生まれたばかりの子供を連れて来日し注目を集めた。勇気づけられた日本のファンも多かったようだ。

ピストルを持って登場します。この状況は、その場にいる全ての人達を危険に晒します。ルチアは正気を失いながらも、そんな状況の中「敵を倒した」と誇らしく思うのです。歌いながら、私もその感情を満喫しています。稽古は「武器を持って登場してみようか」といったラフな形で始まりました。そして、どう動いていったらいいか、など細部を演出家と一緒に創り上げた演技なのです。その過程はとてもエキサイティングなものでした。私はルチアを歌うにあたって、ドニゼッティの人格も徹底的に分析して、精神科の専門家の意見を仰ぎながら役作りをしました。ドニゼッティは、自分も精神病院で亡くなったのですから、狂乱とはなんたるかを知っていたでしょう。

レパートリーの選択も慎重に

——オペラ歌手を志したきっかけは何ですか。

D もともと音楽が好きで家族のもとに生まれたので、ピアノは習っていましたし、演技も大好きで、物心ついた時から

歌ったり、演じたりしていました。そして12歳の時、テレビでストラダスとドミンゴが主演のオペラ映画『椿姫』を観て、「これこそ人間が実現できる一番美しい芸術だ」と心を奪われ、歌を学び始めました。私にとって、魂レヴェルでの感情を伝えることが歌うということでした。そして今でも、道行く人や映画を観ながら、人間という生き物についての洞察を深めています。

——貴女のコロラトゥーラには、緻密に感情が込められています。どのようにしているのですか。

D 自然に任せるのは勇気がいることですが、毎回、その時に沸き上がってくる感情を自由に流させているのです。そういうことで、コロラトゥーラのフレーズから感情が溢れて来て、「こういう表現もあったか」という驚きすら覚えることもあります。

——貴女は技術的に完璧であるために表現力をないがしろにせず、低音もしっかり自然に歌い、そのまま高音へ挑んだりしますが、怖くないのですか。

D 私は低音でも、重要な意味を持つ部分は全て大切にします。例えばモーツァルト《魔笛》の夜の女王のダイアローグも《魔笛》とはなんたるものかを説明する大切な部分なので、気取った頭声ではなく、大声でしゃべります。

——そのようなリスクを冒して、今までに発声で苦労したことはないのですか

D そうならないように、今でも緻密に勉強を積んでいます。実は学生の頃、声帯に問題を起こしたことがあるのです。手術を勧められ、13人の医者を転々となりました。一度手術をしたら、もう二度と前のようには響かないと知っていたからです。その中で手術なしで治せるという3人の医者につきながら完治させたので、今でも注意深く毎日の鍛錬が続いています。その上で、声帯に負担をかけずにセリフを言ったり、叫ぶことすらも研究済みなのです。

また、レパートリーの選択にも細心の注意を払っています。私の人生を決定した思い入れの深いヴェルディ《椿姫》ももっと早くに歌うこともできたのです

「上から見下ろすような態度は私の表現の妨げになるのです」



© Erato-Simon Fowler

が、2005年に決まっていたデビューを、自分の声と表現の幅に未熟さを感じたためキャンセルしたほどです。そうして2013年にメトロポリタン歌劇場でやっとデビューしたのです。

作曲家と脚本家の芸術を伝える単なる楽器

——私はその後、チューリヒ歌劇場で拝見していますが、貴女のヴィオレッタ（《椿姫》）は従来の悲劇のヒロイン的ヴィオレッタよりも、成熟した女性としての包み込む深い愛情が感じられて心を打たれました。

D それは嬉しいです。私も彼女はそういう女性だと理解してきましたから、熟するのを待っていたのです。

——貴女は一昔前のディーヴァとは対局にいる存在ですが、何故いつまでも自然体のままでいられるのですか。

D 私は、作曲家と脚本家の芸術を伝える単なる楽器です。そして、登場人物の人格の深い部分にまで触れ、聴衆が、悲劇では一緒に泣き、喜劇では笑ってくれるように演じ、歌えるためには、その聴衆よりももっと人間的でなければ無理だと思っています。ですから、上から見下ろすような態度は私の表現の妨げになる

のです。

アクロバット・スポーツのイタリア・オペラ

——ニューディスク「ベルカントの炎」についてお聞かせください。

D 恩師のカルメン先生からはベルカント唱法のイタリア・オペラを中心に学びましたし、私のデビューはドニゼッティ《ドン・パスクワレ》のノリーナ役でした。そして、この世界に入るきっかけとなったのが《椿姫》ということもあり、このCDは私の歌の核となるものです。私の大好きな曲を集めました。このよ



■ CD 情報
ベルカントの炎～オペラ・アリア集 (国内盤・4月22日、海外盤・3月30日発売)
〈出演〉D. ダムラウ (S)
〈仕様〉12 cm CD アルバム、国内盤は解説、歌詞対訳ブックレット付き

うなアリア・アルバムでは、今まで舞台上で全曲を歌ったことがない役も歌えるのが大きな長所です。例えばレオンカヴァッロ《道化師》のネッダのアリアは、私が一番好きなオペラ・アリアの一つです。これは、圧縮された感情が、もの凄いい力で噴火するようなアリアで、彼女の中で禁じられた愛の炎が燃え上がるのです。私は公演中に、普通の人が体験できないようなことを経験するのが好きなのですが、それにはイタリア・オペラは最適です。イタリア・オペラは、精神的極限状態を多く描いているし、声にとってはまるでアクロバット・スポーツですから。イタリア・オペラのCDが完成した今、次に挑戦したい役柄はグノーのジュリエッタ（《ロメオとジュリエット》）です。

最後に特筆すべきは、これだけオペラ歌手然としたダムラウの歌うドイツ・リートが、甘く柔らかく心を癒してくれるということだろう。ナクソスレコードから、今までダムラウの録音ボックスですが、今までの出来なかつたシューマン歌曲集が単独発売された。この両極の世界をこれだけ極められる希有のディーヴァと言えよう。